



本 部 会 報

SERVAS JAPAN
With every true friendship we build the basis for World Peace.

2015 年 4 月

1. 国内会議の報告と今後の検討課題について

会長 K. T.

(1) 第 37 回日本サーバス国内会議の報告

今年度の国内会議は、九州支部がホストとなって去る 3 月 14 日と 15 日に福岡市リーセントホテルおよび西南学院大学コミュニティセンターの会議室で開催され、本部役員、各支部代表、九州支部会員の合計 30 名余が参加しました。外国からのゲスト来訪はありませんが、Skype を利用したビデオ会談が、福岡会場と国際サーバス (SI) 会長の Jonny S. さんと今年 10 月にニュージーランドで開催される SI 総会組織委員の一人である Amir L. さん (イスラエル) の 3 元を結んで実施されました。

会議以外の行事としては、14 日夕にリーセントホテルのレストランで懇親会が催され、15 日午後には九州支部会員の案内で、参加者の一部が元寇防塁遺跡と箱崎神社を見学することができました。なお、15 日の午後には、同じ会場で九州支部総会が開催されました。

以下、議事の概略をご紹介します。

議題 1) 各種活動報告

各支部や IT 委員会など専門部の活動については後述しますが、本部としての活動は国際サーバスや各国サーバスからの通知や情報を各支部に連絡した程度でした。東アジアコーディネータの韓国 Song D. さんへは、九州支部と韓国や台湾サーバスとの活発な交流を日本サーバスの実績として報告したほどです。

本部の決算報告としては、2013 年末の会員数 270 名による分担金その他の収入 65 万円余、支出 36 万円余で、差引き 291,752 円を繰越しました。認定数はホスト会員 43 名、トラベラー会員 3 名の計 50 名で、スタンプ代収入 171,000 円から国際本部へ 51,296 円を納入しました。特別会計については、昨年度は国際会議派遣がなかったので、89,076 円を繰越しました。

本部予算のうち、国内旅費補助について従来は「遠隔支部」役員にのみ往復旅費の 2 分の 1 相当額を支給していましたが、昨年度国内会議の決定に基づいて今年度は開催地支部を除く全役員に 4 分の 1 相当額を支給します。今年は九州支部の対象者 3 名に支給しないこともあって、結果的に総額では昨年より少ない支出となりましたが、遠隔地から参加する役員の個人負担額が増えることは否めません。義務として国内会議に参加する会員への補助として 1/4 方式が 1/2 方式より公平といえるかどうか、今後検証が必要と思います。

各支部では、例年通り、年 1 回～6 回の支部例会開催と支部会報発行の活動が継続されました。が、多くの支部で会員減少の傾向は止まらず、現在の会員総数は 250 名台までになり

ました。高齢化して自発的に引退される会員についても、会費未納を理由に会の方から除名する場合にも、事情を伺って何とか会員を続けていただけるように説得する努力が必要だと思います。個人的なメリットは多くないままに長年にわたって会員でいてくださった方々を機械的に処分することは極力避けるべきだと思います。

一方で新入会員が定着せずに数年で消えていくのは、これまた寂しい限りです。サーバスに現代的な魅力がないためでしょうか。旅行情報はネットでいくらでも入手できるし、face-to-face の人間的なおつきあいを敬遠して、ネットを介した情報の共有あるいは対決の方を好む人種が増えているのでしょうか。それでも一部の国にはサーバスのチャンネルで世界と関わっていきたい、サーバス活動を通じてよりよい世界を模索していきたいと考える若者がいます。日本でもそういう若者を発掘して次代を託したいものです。

議題 2) ホストリストの電子化

昨年の会議での決定に基づいて、ホストリストコーディネータ (HLC) の Tさんと IT 委員長の Nさんが大変な努力をしてくださり、福岡会議までに電子版ホストリストが完成しました。各支部における訂正や微調整をへて近々国際サーバスの Dolphin ネットに掲載され、各国の HLC がダウンロード、印刷できることとなります。一部の国のように個々のトラベラーや会員がダウンロードすることは許可しません。LOI 発行国の HLC がプリントアウトしたものが提供される形をとります。

同時に印刷版のホストリストも完成して福岡会議の席上で配布されました。電子版と印刷版それぞれの取扱いや相互の関係について種々議論されましたが、電子版は外国サーバス向けのものとして国内会員には開示しないこと、印刷版はメールを利用しない会員のために存続させる必要があり、さらには国内会員間の名簿の役割を果たしているため、少なくとも来年は作成を継続することを申し合わせました。

この関連で、会員票などの管理書類の改良が HCL と IT 委員に付託されました。



議題 3) NPO法人化

昨年の国内会議で、中国四国支部の国際交流活動をテストケースとして NPO 法人化の動きをスタートさせることを決定しました。ところが、広島市から国際交流団体として助成を受けるには、参加者の 8 割以上が広島市民であること、事業期日を確定してから助成申請すること等、サーバス活動の中ではクリアできない基準が多く、2014 年中には事業の実施に至りませんでした。日本サーバスの社会的な認知・評価を高めるために NPO 法人化を目指す方針には変わりありませんので、今後も検討を続けていきたいと思っています。

議題 4) 日本サーバス被災者支援プロジェクト

ピースセクレタリ (PS) の Tさんは福岡会議に参加できませんでしたが、震災以来の宮城県気仙沼市小泉地区のコミュニティー再建を支援する活動を総括した報告書を送ってくださったので、会場で配布するとともに、会計状況については Tさんの報告に基づいて Tが説明し

ました。今後も継続するプロジェクトですので、会員各位の物心両面の支援応援が望まれます。

なお、国際サーバス PS であるフランスの D. S. さんがニュージーランド会議に行く前に来日しますが、その際に T さんの案内で現地を訪問する計画があります。

議題 5) モンゴル障害児教育支援プロジェクト

近畿支部からの提案に基づいて、本年 5 月にモンゴルから来日する障害児教育研修団を日本サーバスとして支援することが決議されました。このプロジェクトは近畿支部長の H さんとモンゴルサーバス会長の H さんとの話合いから始まったもので、約 10 日間滞在して近畿各地の施設を訪問し関係者と懇談する計画です。団員 11 名は自費で来日しますが、研修期間中はサーバスホストがホームステイを提供するとともに、交通費などを支援するために寄付金を募ります。この種の国際協力は JICA や専門団体あるいは二国間友好組織に任せるべきとの意見も出ましたが、NPO 化に向けて日本サーバス独自の活動実績にもなると思いますので、ご協力方よろしくをお願いします。

議題 6) ニュージーランド国際大会への代表の派遣

3 年ごとの SI 総会の第 30 回大会が、今年 10 月 10 日～16 日にニュージーランドのオークランド郊外で開催されます。これに日本サーバス代表者 1 名とユース部会代表者 1 名の計 2 名を派遣したいと思います。代表者とは日本サーバスから委任を受けた人であり、会長である必要はありません。今回の総会に付随してユース大会が開催されるわけではありませんが、各国のユース部会の会員が多数参集すると思われるので、日本のユース部会の方に彼らと交流してその熱気を感じてもらいたいと思います。

このための旅費補助として、本部特別会計予算にニュージーランド往復航空券の半額相当 75,000 円の 2 名分計 15 万円を計上して国内会議の承認を得ました。

議題 7) 来年と再来年の国内会議の開催地

来年の国内会議は、北海道支部がホストとなって 2016 年 3 月 12 日(土)と B 日(日)に開催することが合意されました。場所は札幌市内になる予定です。旅費が高額になるので、参加する方は今から「自助努力」を始める必要があるかもしれません。

再来年の開催場所についても議論しましたが、結論は出ませんでした。

議題 8) 役員人事

昨年の会議では、2014 年中に新会長および新会計役を選任して今年の福岡会議で引き継ぎ式を行うことが約束されましたが、結局それは実現せず、今年の会議では「今年こそ新人発掘に注力して、来年度国内会議までに決定する」とのミッションを与えられて会長の T および会計の I さんが残留することになりました。慙愧の極みではありますが努力します。

議題 9) 日本サーバス年間スケジュール案 (共通理解として)

これは主として役員向けの資料で、吉崎副会長より昨年の会議でも提案されたものです。E-HL の完成に伴って一部手直しが必要と思います。ご意見ご提案をお寄せください。

番外) SKYPE を利用した 3 元会談

国際会議の案内への返信で福岡会議の予定を知らせてたところ、SI 会長の Jonny さんから、ビデオ会議で参加できないかとの話が出たものです。九州支部の O 支部長に振ったところ、久留米の N さんが担当してリーセントホテルの会場に機器とスクリーンを設置して実現させていただきました。Jonny さんからはサーバスの理念について少々小難しいレクチャー

があり、Amir さんからはニュージーランド大会の宣伝が話されました。日本側からは熊本の M さんがオーストラリアでのサーバスとの出会いを語り、名誉会長の A さんが日本サーバスの誕生時のエピソードを紹介し、N 顧問がモンゴルサーバス支援の現状を伝え、スクリーンのお 2 人は興味深く聞いていました。これらの内容は後日メールで確認しあいました。

(2) 今後の検討課題

時間の関係で会場では議論できませんでしたが、今後、役員メール等を使って検討したいと思います。

- 1) 東北支部の T さんから、本部ホームページを改善する案、各県ごとに組織化して支部運営するが提起されました。

2. 日本サーバスの創立を早めた歴史的エピソード

—ケンブリッジ大学生 ラッセル・シラー君の来日—

(この記事は国内会議において Skype を利用したビデオ会談の際、国際サーバス会長の Jonny さんと SI 総会組織委員 Amir さんに話した内容です)

Starting Story of Servas Japan - Historical Episode accelerated creation of Servas Japan -

Dear Jonny and Amir,

Takashi Aoki

Formation of Servas Japan was accelerated by a Cambridge University student Russel Schiller, a Servas traveler staying in his first visiting country, the USA in 1961. He wanted to visit Japan after USA but no Servas organization existed in Japan.

He decided to send a letter to the newspaper company in Japan publishing paper in English every day, asking to print his message addressed to the Japanese readers in the newspaper. Message said, "Please write me back if you wish me to stay at your home. I am planning to visit Japan shortly to make friends in such a mysterious country." I sent my letter to him with some excitement.

In January of 1962, a cargo-passenger ship arrived in Yokohama port from west coast of the United States and the English young man stepped out. Surprisingly, he immediately encountered the totally unbelievable scene for him. Many Japanese rushed to him and surrounded him, crying "Welcome visit Japan." They were the mixture of many newspaper men, radio staffs but also considerable number of usual persons included. This apparently means many people mailed their letters to Schiller-san in the USA like me. They agreed very positively to Servas spirit and were ready to open doors to foreigners.

The group of these kind of people raised many questions with the strong interest and excitement to Servas and Schiller-san fully enjoyed very busy Japanese happy days to meet many friendly Japanese. Movement of Servas Japan creation boiled up and this new organization started already in September 1962, more than 50 years ago.

Thus, Servas Japan started very smoothly only after half-year from Schiller's first visit to Japan.

This is the true story more than 50years ago.

(日本語訳)

名誉会長 青木 高

日本サーバスの創立はシラー君（日本サービス創立に先だって来日）の来日によって早まった。彼はアメリカの次に日本を訪問したいと思っていたが、日本は未だサービスに加入していなかった。そこで彼はサービス旅行中のアメリカから日本の新聞社（英文版発行）に「日本のみなさんに」というメッセージを送付、これが新聞に掲載された（英文）。メッセージは「日本人の家庭に泊まりたい。泊めたい人は手紙を下さい。夢の国、日本にこれから行きます」。私は早速手紙を出した。

1962年1月に横浜港に貨客船が米西岸から到着、降り立ったシラー君は予想もしなかった歓迎を受けた。大変な数の報道陣、それに加えてかなりの数の一般人が「日本来訪歓迎」と叫びながら彼を取り囲んだ。つまり彼の手紙に沢山の人が私と同様に返信し、彼の来訪を待っていたのだ。

かくして質問攻めとサービスへの強い関心の表明の真っ只中で多くの日本人と会い、日本で忙しさと喜びを満喫、日本側では日本サービス創立気分が急速に高まり、彼の来日後半年の9月に日本サービスは発足した。

以上、50数年前の本当にあった感動のエピソードをご紹介します。

3. 日本サービス生き方を決める出来事とは？

副会長 吉崎 収二

いま振り返ってみると私の人生を決定づけたもっとも重要な出来事は、22歳の時に、1年間イスラエルのキブツという協団体（あえて共同体でなく）で生活し、その間に第3次中東戦争を経験したことかと思えます。

そもそも事の始まりは、教育大学の3年生の時でした。本来なら、約6週間の教育実習なるものを終了し、教員としての現場経験も少しは積み上げ、殆どの学生は、いよいよ教師としての自信と意欲に燃えてくる時でした。

しかし私は、多くの仲間たちとは反対に自信を喪失しておりました。教育実習で授業がうまくいかなかったわけでも、単位が認定されなかったわけでもありませんし、保護者とのトラブルがあったわけでもありませんでした。ただひとつ最も心に響いたものは子供たちの純粹そのものな視線でした。

教育実習での担任は、小学校2年生でした。小学校で2年生というのはある意味一番手がかからないとか指導しやすいといわれる学年のひとつと言われております。通常1年2年と同じ先生が持ち上がり比較的ベテランの先生が担任することが多いからです。事実私のクラスも力のある先生が担任されており学習態度はほぼ完璧でした。そういう中で実習をさせていただいているときにふと重要なことに気が付きました。2年生という子供たちはわたくしの言うことをすべて100パーセント、何の疑いもなく素直に受け入れてくれるということに気が付きました。たとえ少しぐらい間違っただけを教えたとしても何の疑いもなく心から信じ込んでくれるのです。冗談などもっての外です。

それまで21年間生きてきてこれほどまでに私のすべてを、何の疑いもなく受け入れてもらったことはなかったのです。果たして私は、本当に子供たちに教師として全面的に受け入れられるにたる人間なんだろうか？

いわば、なんとなく無難な公立学校に合格し、合格できそうな教育大学に入り、部活や学生お決まりの家庭教師や時には麻雀やパチンコを楽しみ、大学の単位もそこそこに履修して

いてそのまま卒業して、はたしてあの純粹そのものの子供たちの思いこたえられる教師になれるだろうかという不安に襲われかつ真剣に悩みました。

そこで思いついたことは、こんな生ぬるい生活をしているだけではあの子供たちの期待にこたえられる教師にはなれない、もっともっと自分自身を厳しい環境において鍛え直さなければならぬと思いました。

即ち全く自分の力だけでどれだけ頑張れるか試さなければ！気楽に簡単に助けてもらえない環境に自分自身を置いて力いっぱい頑張れる自分を作り上げなければ、とても教師は務まらないと思うようになっていました。したがって教育実習終了後は自分探しをしていた状態だったと思います。

そのような時に、ちょうど日本イスラエル協会というところでイスラエル建国の原動力となったともいわれているキブツへの1年間の研修の募集がありました。その研修は個人での参加ではなく日本人グループとしての参加でしたが、まったくの異国の地でさらに言葉も違う、主に農業体験を通じて生活するというものでした。藁をもつかむ思いで父母に相談したところ、お金の方も何とかなるということで1年間休学して、ハイファという大きな港町にほど近い、キブツ「ラマトヨハナン」で24名の日本からの仲間と生活いたしました。

1967年4月にキブツについてから、6月には第3次中東戦争（イスラエルでは6日間で終戦したので6日間戦争）が勃発し防空壕にも逃げ込んだりしました。運よくイスラエル軍の完勝で身の安全は守られましたが、目も当てられない戦争の悲惨な状態は、思い出だけでも身の毛がよだつ状態でした。昨今の世界の混乱状態を見るにつけてもどうしてこんなにまでも人間は殺し合いをしなければならないのかとつくづく情けなくなってしまいます。水も食料もない大砂漠で果てしない殺し合いが今も続いているのです。今こそサーバスの理念が世界中に必要だとしみじみ感じます。

あの6日間戦争にイスラエルが勝利したので現在の自分がありますが、一步間違っていればとんでもない危険なことになっていたかもしれませんでした。

名実ともにキブツでの1年間は私にとっては貴重な貴重な体験となりました。その後おもに特殊教育の教師として頑張りきることもできましたし、41年にわたる世界各国の約400名のサーバスのメンバーとの交流、身近な所ではニセコススキー場でリフトやゴンドラで隣合わせた外国からのスキー客との交流などは楽しみの極みです。